

草創期について

近野信義 (39卒)

初めに

一昨年、若手OBとコーチ陣と懇親の機会があった。その中で、本校のラグビー部が何時どのようにして創部したのか分からない。現在、現役も頑張っている、誕生したいきさつや歴史が判ればもっとモチベーションが上がる。伝統を知ることにより、現役はさらに誇りをもつと思う。「人間として、男として」もう一段高いレベルに達すると感じる。との意見が出された。それでは、70周年を迎え草創期からの大先輩も御健在である。創部のいきさつを直接聞く良い機会であると考えた。

平成27年2月25日(水)第1期生吉田氏、第2期生近藤氏、第5期生小坂氏から創部当時の話を伺うため、近野(39卒)、佐田(40卒)、金(41卒)が男鹿市を訪問した。つたない文章であるが、ここに草創期について大先輩から当時の話と思いを聞きまとめた。

歴史が始まる

母校は創部2年目の昭和22年5月、全県中等学校ラグビーリーグ戦が開催され出場した。会場は秋工グラウンド、土の上を走るのは何故か久しぶりのようである。やることは決まっていた、タックルとスクラムである。母校のスクラムはセブンである。相手の秋工は、エイトスクラムである。相手側スクラムのオフサイドラインは、ナンバーエイトの足元にあるボールの位置である。そこを味方のフランカーが徹底的につく。足でも手でも出せるものは何でも出した。相手スタンドオフにボールが渡っても、すぐタックルである。全国大会でも優勝を重ね、実績がある秋工が戸惑ったのもうなずける。

秋工の部員はスパイクをはき、そろいのジャージを着ている。こちらの服装は、メリヤスのシャツに柔道着の下ズボンがパンツ替りであり、しかも裸足である。裸足でゴールキックを狙うときは、足の親指を開いて蹴る工夫をした。スパイクを履いていたのは、俊足の加賀屋氏一人であった。足

の親指から血が出ていた。パンツ替りの柔道着の下ズボンからフンドシの紐が出ていた。恐らくフンドシすら履いていなかった者もいたはずである。とにかくタックルを徹底的に行った。相手がタックルをさせまいと低い姿勢で来ても、その下にもぐって仕掛ける。結果、創部二年目にして秋工に3:0で勝った。

学校開設

昭和17年秋田市立中学校が開設された。場所は現在地の秋田中央高校である。すでにあった秋田市立土崎高等女学校に併設され、その後、昭和23年戦後の教育改革で両校が合併し秋田市立高等学校となる。開校当時は、女学校とは別々の校舎であった。

吉田氏は、第一期生13歳で入学し当時は五年制の学校であった。入学試験の倍率は、8倍の難関校である。二期入学の近藤氏にも入学のいきさつを聞いた。当初は、秋田中学校に進学するつもりであった。しかし、通っていた国民学校高等科の先生に相談したら、秋田中学校は、親や兄弟が入った者でなければ絶対に受からない、新設の秋田市立中学に行けば歴史を創れる、と言われ受験したそうだ。入学試験の面接時この学校の歴史を創るために受験しましたと答えた。ラグビー部員は成績が良く、学年でも常に上位クラスの者が多くいた。

開設当時は、戦争真只中である。初めのころは、授業も順調に進んだが、だんだんと戦火が激しくなり、そのうち授業どころではなく、ほとんど毎日勤労奉仕に駆り出された。

敗戦が色濃くなった昭和20年8月14日の夜、土崎港にある日本石油土崎製油所が米国のB29の爆撃を受け全滅し、多数の死者が出た。翌日の8月15日、天皇陛下の玉音放送で敗戦を知った。それまでの米英撃滅が目的であり野心に燃えていたが敗戦で一瞬にして失望に変わった。茫然自失しばらくは何も手につかない生活が続いた。学校に復帰しても勉強が手につかず、真空状態である。

創部のいきさつ

時間の経過とともに次第に気持ちも落ち着きを取り戻し、これからこの先どう生きるべきか、

何をすべきかもがき始めていた。

そのような時、初代キャプテンの吉田氏宅に、母のいここにあたる秋工ラグビー部監督の高桑先生が中国から復員し挨拶に来た。帰り際にラグビーが話題になり、吉田氏があれこれ質問するうち高桑先生から、もし興味があるなら秋工に練習に来てはどうかと声をかけられた。吉田氏は、早速秋工ラグビー部の練習に参加させていただいた。秋工の部員は、何の違和感もなく仲間に入れて親切に接していただいた。このときは大変有り難かった。と、今でも思うそうだ。

何回か練習に参加するうちに、母校にも是非ラグビー部を作りたいと考えるようになり、国鉄男鹿線でいつも一緒に汽車に乗車し親しみを感じていた鎌田先生に相談した。鎌田先生からは、小竹先生に相談しなさいとの助言をいただいた。小竹先生は、生徒鑑をしており勉強に厳しく威厳があり校内でも近寄りたがたい先生であった。ある日、意を決し恐る恐る小竹先生の前に、直立不動の姿勢でその旨を申し上げた。小竹先生は、「お前、俺についてこれるか」の一言でした。その言葉に恐れを感じたが、引き下がるわけにもいかず思わず「はい」と答えた。

ついに創部

昭和 21 年 5 月ついにラグビー部が生まれた。創部とはいっても、まったく何も無い状態である。部員募集は、吉田氏が通学していた国鉄船川線の生徒を主体に声をかけた。ようやく良い意味での猛者連 15 人が集まった。しかしラグビーをやるには、環境がまったく整っていない。部室もない、ジャージー・スパイクもない、ボールもない。グラウンドすらないのである。それよりも世の中にお金もない食べ物もない時代であり、学校に弁当すら持ってこられない生徒もいた。

日常の生活がそういう厳しい状況であるため部員が毎日練習に来てくれるか、試合に選手がそろえるかが一番心配であったそうだ。そんな中、練習場所は学校の周りにいくらでもある事気がついた。

当時の学校の周りは、建物（蕪検定所）が一か所あるだけで、住宅はまったくなかった。あるのは一面砂場であり校舎の後ろには何故か飛行場があった。その砂場を生徒たちは砂漠と呼んでい

た。その砂漠を練習場所にし、ボールは古いバスケットボールにワラを詰めたものが一個だけ、着ているものは、メリヤスのシャツ、柔道着の下ズボンそして裸足である。夏場は砂が熱く足を着くのも大変であり、足指の間から血が出ていた。あまりにも熱く足の持って行き場がない状態であった。夏の海水浴場の砂場を思い出していただければ想像がつくと思う。秋口からは、逆に冷たくやはり足の指の間から血が出ていた。バスケットボールにワラを詰めたボールであるため、パスを出すにもスナップが利かないし遠くに投げない、キックをしても飛ばない。そういう練習風景を見て笑った者がいた。冷静な吉田キャプテンの堪忍袋が切れ、笑った相手を許せない気持ちになり殴ったこともある。

毎日の練習風景

毎日の練習は、走ることとスクラムとタックル・セービングのみである。とにかく徹底して走らされた。小竹先生は胸を悪くしていた。戦争での怪我かまたは肋膜炎ではないかといわれていた。生徒に見本を見せるため胸を押さえながら走る姿は痛々しく、そういう姿を見て部員も発奮した。スクラムの練習では、ハーフがボールを入れると、一番と三番がフッキングをしてボールをかき出していた。練習時間は、3時半頃から6時か7時頃まで行った。

その後、国鉄土崎工場のラグビー部員がきて、練習の方法などを指導していただいた。FWとBKが分かれて練習することやコンビ練習も初めて知った。特に秋工出身の楢岡氏は熱心に指導してくれた。

創部から程なくして初の夏合宿である。学校の音楽室の机を並べ、ベッド代わりにし、毛布一枚だけで眠った。食事は、食糧難の時代であり各自が米を持参した。中には米を持って来られない者もいたはずである。夜眠るときは米ぶちの上に一人寝て米番をした。そうしなければすぐに米が無くなってしまう。1週間の合宿は米が無くなり5日で終わった。おかげで大した物はなかった。ある日、チカの佃煮がでたがウジ虫がたかっていた。それを洗って食べたが体を壊す者は誰もいなかった。

翌年以降の夏合宿は、土崎の嶺梅院近くの見性

寺で行った。カヤが無く蚊に刺され肌があちこち赤く腫れていた。それでも皆疲れて死んだように眠った。

当時の時代背景

当時は、終戦間もなく、物も金も何もない時代である。食料事情は悪く空腹感と空虚感が先立ち、希望すら持てない時である。世の中は荒れていたように学校生活も荒れていた。強いものが幅を利かせ、不良が跋扈するときでもあった。船川の街にも柔道三段の番長がいて、いわゆる弱い者のいじめが起きていた。これに敢然と立ち向かったのが近藤氏であった。

男鹿駅前でも1対1の決闘が始まった。周りはヤジ馬で黒山の人ばかりである。緊張みなぎる中ついに始まった。恐れながらも覚悟を決めた戦いは一瞬にして、勝負はあっけなく終わった。その後番長とその取り巻きは金川のドンには絶対に逆らうなとクギを差され、影が薄くなった。

生徒の中には、カバンにナイフを常にしのばせ、何時事が起きてもいいように準備している者もいた。いわば俠気さかんな荒れた時代であった。

それでも、部員一同毎日厳しい練習に励んだ。そうした厳しさから部員の連帯感と仲間意識が強くなってきた。ある日、荻田校長から「吉田君ありがとう」と言われた。何のことかと思っていると、続けて学校長が「君がラグビー部をつくってくれたおかげで、私は、スポーツの良さを知った。君の言うことだったら何でも協力する。」との言葉をかけられた。文武両道を掲げる学校長にとって荒れた時代の教育は容易でない事と感じていたが、ラグビー精神は教育価値が高い事を知った。

夏合宿では、死んだふりをして大目玉を喰った部員も居た。創部間もなく何故あの厳しい練習に耐えられたのか、新しい事を始める難しさを乗り越えたのは何だったのか、本人たちもうまく説明がつかないようである。

古き良き時代

ある日、嶋田氏がどこから仕入れてきたのか学校に酒2升を持ってきた。練習が終わってから、これ幸いと高清水の丘に悪ガキが集まった。めっただに入らない貴重な物である。何時もお世話にな

っている西村部長にも知らせよう、それから教頭先生にも知らせようと言う事になり、高清水の丘は先生と生徒の意思疎通と交流の場となった。生徒と先生が酒盛りをする、今では信じられない古き良き時代でもあった。

また、吉田氏が卒業する時仲間が送別会を開いてくれた。送別会が終わり秋田駅前金座街の店を出ると、陰悪な空気を感じた。恐る恐る近づいてみると、最悪の状態になっていた。これは大変だと思い吉田さんが「逃げろ」と叫びながら全員が走った。夜も遅い時間帯に、手形山崎に自宅がある母校の佐藤敬先生の自宅に逃げ込んだ。佐藤敬先生は、何事があったのかびっくりしていた。状況を話し一晩自宅にお世話になり、翌朝解散した。後日、佐藤敬先生からお褒めの言葉をいただいた。あの騒動に巻き込まれていると、部の存続すら危ぶまれ、全員退学すら考えられる。よく我慢して逃げた。本当に良かったと褒められたそうである。

部歌

部歌が作られたのは、創部してから間もなく初代監督の小竹先生が手掛けられた。秋田高校が明治大学、秋田工高は慶応大学の部歌をそれぞれ引用している。小竹先生は、早稲田大学の部歌「北風」を引用した。私事で恐縮だが最近まで一番の「灼熱」二番の「北風」三番の「世の中」の歌詞すべてが早稲田大学の部歌と思っていた。インターネットで検索して初めて一番と三番が小竹先生の作詞であることを知った。早稲田大学の部歌は、ちなみに「北風」一番だけである。当時の生徒は、練習が終わると毎日来る日も来る日も部歌を歌ったそうである。特に三番の「世の中は荒れ狂い 道地に墮つるも 厳として揺るがざるラグビー中央」は、生徒の心に深く刻まれていたことと確信した。吉田キャプテンの金座街での騒動に対する自制心が働いたのも当然であった。ラグビーを通じてモノの善悪、将来の向かうべき方向などが備わり人として成長したものと思われる。この小竹イズムが本校ラグビー部の原点であり、精神的な支柱となった。

小竹先生は昭和21年～22年の2年間の在籍であった。厳しい練習と高い志が母校の伝統の基礎を作り上げたと思う。いわゆるラグビーから人生を学び、生きていく上で必要なものすなわち、

社会性を身につけたと思う。この2年間でルールをまもるフェアプレイの精神、自己犠牲の精神、敢闘の精神がグラウンドを通じて教育されたものとする。

初代キャプテンの吉田氏は、ラグビーは人を創りロマンあふれるスポーツである。と常々おしゃっている。

文武両道

創部50周年(平成8年)式典に岸先生(元部長)へ招待状を送付したが、所要のためアメリカに行っているのでは、残念ながら欠席しますとの手紙が佐田氏に送られてきた。その手紙の中で岸先生は、「君は東大、僕は花園」という学校単位の文武両道ではなく、一人ひとりの文武を迫及することが本来の在り方です。との記述がある。すなわち、目標であった花園が目的となり、育てることよりも勝つことが優先されているのではないかと危惧をされていた。

ラグビーエリートをつくるのではなく、学業とラグビーが一体となり、選手を育てるという創部以来の伝統を継承していただきたい。また更に創造力をたくましく新しい伝統を築いていただきたい。ただ単に昔の話として過去を引きずるのではなく、過去から未来に生かしてほしいと思う。

OB会の設立

卒業した生徒は間もなくOBとして活動した。近藤氏を中心とした現場グループはグラウンドで指導、仁村氏を中心とした後方支援グループは合宿での米をはじめとした食料の差し入れを始めた。

OB会が正式に発足したのは、初代の吉田氏が卒業して10年目の昭和31年9月である。会則が制定され、組織として活発化してから今年で60周年である。思わず大先輩の母校に対する熱意と先見性に敬意を表したいと思う。

今後とも生徒に対して伝統を継承することが、大きな役割であり使命である。OBは何年たってもOBである事を再認識した次第である。

終わりに

草創期の指導者は、昭和21年から22年まで小竹先生が部長・監督。昭和23年から30年ま

で西村先生が部長・監督、副部長が佐藤敬先生。そして昭和31年から38年まで岸先生が部長、岡先生が副部長、内昭和34年までの4年間は岸先生が監督兼任、昭和35年渡部先生が監督に就任。この指導者の内ラグビー経験者は小竹先生と渡部先生である。昭和23年から10年以上をラグビー経験者の指導者が不在であった。ただし、岸部長になった昭和31年から国鉄土崎工場の駒野屋さんにコーチを依頼している。この間、昭和27年に全国大会初出場、昭和28年に国体初出場をはたした。その後、昭和34年・36年・37年と全国大会に出場している。生徒が如何にやる気を起こし、人格形成をはかる事が、その後の結果に結び付く大切なことであるとする。

最後に草創期の大先輩吉田氏、近藤氏、小坂氏三名からお話を伺っていて、今から70年前の出来事を昨日の事のように記憶され、次から次へと貴重なお話を聞くことができた。青春時代に体験し経験したラグビーが、その後の人生の誇りとなり、生き様となる「丈夫の道」(男の道)を歩いたと感じた。

追伸

本文に出てくる氏名は、あえて本名にさせていただいた。70年前の話であり全て時効になるものと考えた。失礼があつたら素直に謝ります。

初代監督 小竹信行先生 主な経歴

明治42年7月5日生まれ

京都錦尋常小学校卒

同志社中学卒

同志社大学卒

昭和11年東京都尋常小学校任用

昭和14年中国へ戦争招集

昭和19年秋田へ中国から引き揚げ

昭和21年秋田市立中学校任用

昭和23年秋田県立秋田北高校転任

秋田県立増田高校校長で退職

その後、秋田を離れ岐阜県岐阜市に移転した。